

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第43号

2018年3月31日

マタイ受難曲 各論-14 (第 55, 56, 57, 58, 59 曲)

第55曲 十字架の道行き(エヴァンゲリスト)

ローマの兵士たちは刑場であるゴルゴタの丘に向かって、自らの墓標となる十字架を背負ったイエスを引き立てます。そしてその途中、疲労困憊してよろめき倒れるイエスの肩から十字架を下ろし、そこで出会ったキレネ人シモンに背負わせました。

第56曲 レチタティーヴォ「私たちの肉と血こそが」(バス、フルート1, 2、ヴィオラ・ダガンバ、通奏低音、4/4、ヘ長調-ニ短調)

ヴィオラ・ダガンバのアルペジオに、3度又は6度で平行するフルート2本が合いの手を入れる中、十字架の道行きを目撃した信徒(バス)が「私たちこそが十字架を背負うべき者」と己が心を告白します。フルートパートには”a Battuta”(拍子を守って)というバッハの指示があります。

第57曲 アリア「来るのだ、甘い十字架よ」(バス、ヴィオラ・ダガンバ、通奏低音、4/4、ニ短調)

長い苦しみを与えた後に命を絶つという、残酷な刑具(遠藤周作「イエスの生涯」)である十字架を「甘い」とする信徒の心に、私たちが直ちに共感するのは難しいことです。ヤコービによれば「キリスト者は自分を見つめる。『Wirt mir mein Leiden einst zu schwer, So hilfst du mir es selber tragen.: 苦難が重すぎるときはどうか助けてください、私が自分で苦難の十字架を背負うのを』という訴えをイエスは決して拒まない、と信頼して自分の十字架を自ら喜んで引き受ける決意をする」、ということになります。

全曲の中でただ一度、バッハがアリアの独奏楽器にヴィオラ・ダガンバを選んだのには、重音奏法が容易で、豊かな倍音を多く含むこの古楽器の特性が、このアリアにふさわしいと考えたのでしょう。作曲当初このアリアのオブリガート楽器はリュートでしたが、1737年の改稿でガンバに置き換えられたのでした。おそらくガンバの表現力と音量がリュートに勝ると考えたのでしょう。バッハがこのアリアの作曲に力を入れたのは、歌詞が形式上は a- b- a の形を取りながら、音楽は a-b-a 'のように後半を新たに作曲している事からも明らかである、とヤコービは述べています(その点では第 39 曲「憐れんでください、私の神よ」と同じですね)。それ以外にもこの曲の通奏低音には”piano e staccato”と、バッハ自ら書き込んでいる点からもうかがえます。

思い返せば「マタイ受難曲」冒頭の合唱に「あの方を見て。愛と慈しみから自ら十字架を背負うあの方を」という歌詞がありました。このアリアが歌われるのはまさにその場面であり、第1曲の促しに対する信徒の答えと言うべきものでしょう。十字架の道行きを目の当たりにしている中で、低音域のみで演奏され、何かしら子守歌のように聞こえる音楽には、不思議な安らぎすら感じられます。私事になりますが42年前、筆者が初めて参加した「マタイ」の演奏で、若き日の上村昇氏がチェロでこの曲を弾いたのを聴いて、その腕前とバッハの音楽に驚嘆したことを、今もよく覚えています。

第58曲 ゴルゴタの丘(エヴァンゲリスト、兵士たち)

ここからしばらくの間レチタティーヴォ、アリア、コラールを挟まず、聖書の記述が続きます。その長さはマ

タイ福音書第 27 章の第 33 節から 44 節までに及びます。ここに登場する人物は兵士の他、通行人、聖職者たちであり、イエスはもうしばらく前から一言も発していません。曲番号で第 43 曲の終わり近くに「貴方がそう言っている」とピラトの問いに答えた後は、沈黙を守り続けています。そしてこの後彼が言葉を発するのは、第 61 曲の「エリ、エリ、ラマ、ラマアサブタニ(我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのか)」(27 章 46 節)であり、これが最後の言葉となります。マルコとヨハネの福音書では、イエスが十字架につけられてから七つの言葉を述べたと記されていますが、福音書記者(エヴァンゲリスト)マタイはいわゆる「十字架上の七つの言葉」の内、第 4 の言葉だけを記述しています。

ゴルゴタの丘で十字架につけられたイエスに対し、兵士たちはその衣をくじ引きで分け合い、「これはユダヤ人の王」とイエスの罪状書きを掲げ、通りがかりの人々やユダヤ教の聖職者たち、さらにはイエスと共に十字架につけられた人殺したちまでもが口々に「神の子なら十字架から降りてこい!」、「そうすれば信じてやる」、「神の御心なら今すぐ救ってもらえ」などと悪罵の限りを吐きます。

ここに現れる群衆合唱は 58b「Der du den Tempel Gottes zerbrichst: 神殿を倒し三日で建てる者」と 58d「Andern hat er geholfen: 他人を助けても」の 2 曲ですが、どちらもよく似た形式で書かれています。すなわち 2 群の合唱が 1 小節又は 2 拍の間を置いて掛け合い、すぐに一体化して 4 声のフーガとなり、最後に声を合わせて一つの言葉(58b では so steig herap vom Kreuz!: 十字架から降りてこい!、58d では Ich bin Gottes Sohn.: 私は神の子だ(というのなら))を歌います。とりわけ後者はすべての声と楽器がユニゾンで演奏するので、思わずぞっとするような効果を上げています。

第59 曲 レチタティーヴォ「ああゴルゴタ」(アルト、オーボエ・ダカッチャ1、2、通奏低音、4/4、変イ長調)

「狩りのオーボエ」と名付けられた木管楽器はその用途からして音量が豊かですが、音色は必ずしも流麗とは言いがたい、少し唖れたようなといたら楽器に失礼でしょうか。低音域のオーボエであるダカッチャ2本がアルトを伴奏するのは、この後の第60曲と同様の編成ですが、歌詞の趣は大分異なります(p. 164)。

<p>【後記】 前回「発行の間隔を密にする」と申し上げたのにそれが実現できず、本番まで40日あまりとなった今日に至っても各論はまだあと14曲を残しています。いよいよ時間との競争になってきました。できれば今月中にもう1回、4月に2回の発行で何とか完結させたいと思っています。</p> <p style="text-align: right;">(新井治男)</p>
